

お子様業界物語

泉 麻人



新潮社



新潮社

「こさまきようかいものがたり」
お子様業界物語

印刷——一九八九年九月二〇日

発行——一九八九年九月二五日

著者——泉 麻人

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七

電話——業務部(03)二六六—五一—
編集部(03)二六六—五四—

振替——東京四—八〇八

印刷所——錦明印刷株式会社

製本所——株式会社大進堂

© Asato Izumi 1989, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-364602-4 C0095

価格はカバーに表示してあります。



お子様業界物語

*

目次

お入学シンдрーム 7

キティちゃんの魔法 29

3LDK エレクトーン付 55

屋上の木馬がTVゲームに化けた日 79

子役の世界 101

じゃじゃまるの秘密 125

原宿シャレガキ物語 147

走れ！グリコおじさん 171

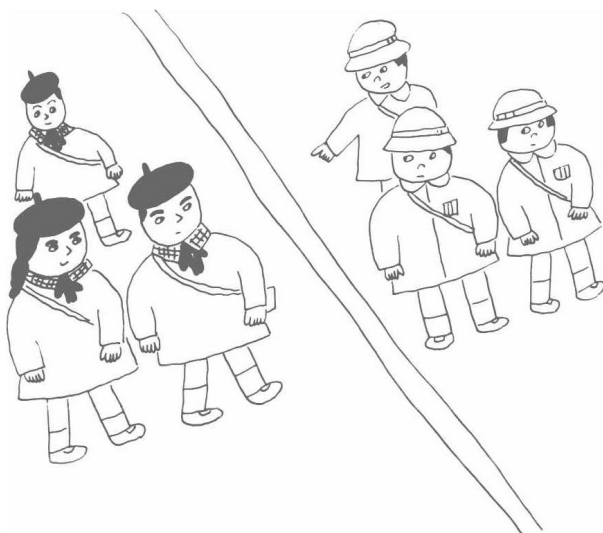
たまプラーザの公文夫人 195

あとがき 219

装幀
*
安西水丸

お子様業界物語

お入学シンдрローム



教育界は「私立の時代」と言われている。私立大学の中でもとりわけ入学希望者が増加しているのが、小学校で入学すればそのままエスカレーター式で大学まで進める、付属校付きの私立。慶応をはじめとして、学習院、立教、青山学院、成城、成蹊、聖心、日本女子大……。ま、一般的にいわゆる「お坊っちゃま、お嬢ちゃま校」という呼び名でくられる学校が多い。その呼び名が表すとおり、確かに公立の小、中、高を進み、国立の大学を受験する、というコースよりもカネは要る。が、厳しい大学受験地獄でわが子を苦しめるよりは、あるいは、変にガラの悪い公立中・高に行かせて可愛いわが娘が不良化するのでは……などと心配することを考えれば、多少カネをかけても小学校から有名私立へ。ま、「娘は日本女子大の豊明通わせてるんです……」といえは、世間体もいいし。どうせ戸建ての家なんか買えないもんね、いまさら。それだったら、教育にカネを投資しよう。

といった、ここ1、2年の外車ブーム、グルメブームと似た背景が「名門私立小受験ブーム」の背景にはあると思われる。そんな小学校受験生の家庭を扱ったNHKのドラマ『お入學』も大きな反響を呼んだ。ドラマのヒットの影響もあってか、63年の慶応幼稚舎の競争率は前年の約4倍から一挙に10倍近くにはねあがった、とも言われている。

名門私立小学校の受験者が増加すれば、いわゆる受験産業も当然栄える。伸芽会^{しんが}、桐花^{とうか}教育研究所、慶進会^{けいしん}、ジャック……現在、東京の名門小受験を対象にしたそういった塾の数は約20校。双樹会^{もうき}に代表される、陰に隠れた組織（主婦が個人で開いているような塾）を含めると、その数は正確には数えられない。

受験戦争の弊害か、英才教育時代の象徴か、あるいはお坊っちゃま・お嬢ちゃまブーム、ブランド志向の間接的影響か。凄じい勢いで沸騰する「小学校受験熱」の実態を、塾側、親側の話を軸に考察していきたいと思う。

まずはその規模において最大、とされる目白の「伸芽会」をたずねた。

学習院、川村学園など隣接する目白文教地区の一角に小学受験塾の大手「伸芽会」のビルはある。

“おおらかに伸ばそう小さな芽”

入口の看板にはそんなキャッチフレーズが記されている。伸芽会はこの目白教室を本部に池袋サンシャイン60、渋谷、自由が丘、浅草、横浜、浦和など東京近郊に計12の教室をもつ。

伸芽会が設立されたのは昭和30年の4月。場所は中野の鍋屋横丁である。設立時から関わっておられる大堀秀夫氏は設立の意味について次のように説明する。

「最初はねえ、私立とか国立への進学を目的にくる人はほとんどいなかった。そういう余裕のある時代じゃないわけです。ま、終戦直後に較べりゃ豊かになってきたわけですが、まだまだ生活に余裕がないから母親も働きに出る。そういう共働きの家庭を対象にした、ま、保育園みたいなね。それともう一方でいわゆる戦後の核家族化が浸透してきて、家にお年寄りがいなくなった。すると、しきたりとか、しつけの部分で若い母親は相談する人が近くにいなくなっちゃったわけです。つまり、*「言葉が遅い」「ごはんを食べない」*っていうときに戦前の大家族だったら姑さんに相談したりね、ま、知恵袋みたいな人が家の中にいたんですね。そういった母親の迷い、育児の悩みに答える、町の教育相談所、みたいな施設としてスタートしたわけです」

発足当初はボランティア、つまり無料であった。入口に「余裕のある人は援助を」とい

った募金箱が設けられているだけであったという。ビジネスライクな進学教育塾としての色合いを帯びてくるのは昭和33年ごろ。

「2、3年、そんな感じでやっていくうちに、たまたまいまの筑波大、当時の教育大の付属に入った子が出てきましたね。それが新聞や週刊誌に載った。『小学校進学塾の登場』みたいなニュアンスの記事がね。戦後も33年、34年になってきますとね、そろそろ幼児教育にお金を使う余裕のある人も増えてきました。そういった世間のニーズにお応えする形で進学塾として企業化したというわけです」

昭和30年に発足した伸芽会は、正に日本経済の高度成長に足並みを揃える感じで発展していったわけである。

ところで実際、伸芽会ではどのような幼児教育が為されているのだろう。簡単に説明しておこう。

クラスは1歳児クラスから、2歳児、3歳児、年中（4歳）、年長（5歳）と計5クラス。ひとクラスの定員は10〜20名。費用は、入会金が7万円、月払いは月4回コースで2万5千〜3万6千円、8回で4万5千〜5万（クラスによって多少のバラつきはある）。つまり、1歳児を月8回のコースに通わせようとしたら、まず入会金が7万、ひと月5万

×12カ月で1年間で計67万円、かかるということになる。2歳児のときから入れて、年長の5歳まで5年間通わせるとしたら、単純に計算して約300万かかるわけだ。

——で、実際、どういうことを学習するわけですか？

「まあ、年中、年長になれば実際の有名校の試験問題をもとにしたテストの訓練というのが主になるわけですが、1歳児、2歳児の場合はほとんどしつけの訓練ですね。たとえば、ハシの持ち方、エンピツの持ち方……そんなことから始めるわけです。2歳くらいになれば、節分のときに豆を用意しましてね、自分の年の数だけオハシで豆をつまんで食べよう、なんてことをやってみたり」

——でも、その辺は家でもやろうと思えばできますよね？

「そうです。ちゃんと教えこめば家庭だけで充分なんですけど、教え方の部分でね、どうしても親つてのは過保護になっちゃったりするわけです、かわいさ余って。たとえばハサミなんかもね、子どもが手にとった瞬間に、危ないからやめなさい！ って怒鳴って取りあげたり。2歳児でも教え方ひとつで安全にハサミが使いこなせるようになるんですよ。最初は切れないオモチャのハサミ持たせてね。あるとこまでいったらホンモノを与えてやる。そういう訓練を愉しく、じっくりとやっていく。まわりに同じ年格好の子がいるから

知らずと競争心がわいて子どもも頑張る。つまり、家庭やあるいはマスプロな保育園や幼稚園じゃ、物理的にていねいに教えこむことが難しいことをね、フォローしていく、ということですね」

と説得されても、「なあんだ、そんなこと……」と思ってしまふヒトは思ってしまったヒトなのだ。高校、大学受験ともなると、親ではとても手に負えない難しい英文法であるとか、妙ちくりんな数式とかが出てくるので、塾学習の必要性というのをわりとストレートに肯定できるが、小学校受験というのは、ほとんど親が頭で把握している生活作法、簡単な知能テストの学習である。だから、先にそういった機関の存在を肯定しておかない限り、どう説明されてももう一つ納得がいかないわけである。

「なんでそんなハサミの正しい使い方やハシの持ち方、あるいは雑誌のマチガイ探しクイズみたいなことさせるのに、5年間で300万も使わなくちゃならないんだ。それだったら毎年ハワイに行って、余ったカネでグルメして、株なんかもちょっと強気で買える……」という方向に思いを巡らしてしまう。

伸芽会ではこういったクラス授業の他に、一般を対象にした公開模擬テストを定期的に行っている。年間約20回（年長児の場合）催されるこの模擬テストには毎回約2千人の受

験者があり、コンピューターを駆使した採点で、各能力別のランキングが数字としてかつちりと提示される。勿論、偏差値なんてものまでここには存在するわけだ（他の大手塾でも模擬テストはあるが、伸芽会の模擬が規模的には一番大きい）。

他に夏期には年長クラスから希望者を募って、草津高原と北軽井沢で2泊3日の合宿セミナーを催す。

330人の定員に約5千人ほどの応募があるというほど、人気のあるセミナーだ。ここでは、5歳児の児童たちを班分けして山登りをさせたり、畑にいったてキュウリをもうで食べさせたり、要するに「自然に触れあう野外学習」というやつを敢行するわけである。2泊3日の旅に親は同伴しない。親離れをさせて、自立心の養成と集団生活に慣れさせる、ということを目的にしている。

一般的に「塾」と聞くと、つい「頭でっかちなガリ勉をつくる」といったイメージを思い浮かべがちだが、こと小学受験の塾に関しては、必ずしもその概念はあてはまらないようだ。つまり、「知能が発達し、礼儀作法はしっかりと、それでいて子どもらしくワンパクな」そんな「丸大ハムの少年」と「教科書のハルオくん」の要素をあわせもったような幼児が理想の塾生ということになる。